

# 永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2018年 7月

「恐れるな、小さい群れよ」「回復するための計画(II)」「最も尊いメッセージ」「なすそうめん」

# 永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

## 目次

今月の聖書勉強

回復するための計画(Ⅱ)

4

聖書の教え

朝のマナ

恐れるな、小さい群れよ

7

*Fear Not, Little Flock*

現代の真理

「最も尊いメッセージ」

40

神の憐れみの最後の招き

力を得るための食事

なすそうめん

44

お話コーナー

「これらのものを持って、ここから出ていけ」  
(Ⅰ)

46

### 【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1  
電話：0494-22-0465 FAX：0494-40-1045

### 【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2  
電話：088-831-9535

### 【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21  
電話：0980-55-8136

アクセス [www.4angels.jp](http://www.4angels.jp)

メール [support@4angels.jp](mailto:support@4angels.jp)

発行日 2018年6月3日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Images on Front page, Dreamtimes  
on Back page

## 悪に対する唯一の防備

イエスは、みことばに感動し、イエスの言われることをよろこんで聞いていながら、聖霊の内住に身をまかせなかった人々に対する警告をつけ加えられた。魂が滅びるのは抵抗によってばかりではなく、また怠慢によってである。イエスはこう言われた。「汚れた霊が人から出ると、休み場を求めて水の無い所を歩きまわるが、見つからない。そこで、出てきた元の家に帰ろうと言って帰って見ると、その家はあいていて、そうじがしてある上、飾りつけがしてあった。そこでまた出て行って、自分以上に悪い他の七つの霊と一緒に引き連れてきて中にはいり、そこに住み込む。そうすると、その人ののちの状態は初めよりもっと悪くなるのである。よこしまな今の時代も、このようになるであろう」(マタイ 12:43-45)。……

神の恵みによって、彼らはこれまで自分の魂を支配していた悪霊から解放された。彼らは神の愛をよろこんだ。だが譬にある石地の聞き手のように、彼らは神の愛のうちにとどまっていなかった。彼らは心の中にキリストに住んでいただくように日々自分自身を神にまかせなかった。……

悪に対する唯一の防備は、キリストの義を信じる信仰によって、心のうちにキリストに内住していただくことである。神とのいのちのつながりをもたないかぎり、われわれは、利己主義、放縦、罪への誘惑などのけがれた影響に抵抗することは決してできない。……時々刻々に神に献身することによって、神とのいのちのつながりを持っているのでなければ、われわれは打ち負かされてしまう。キリストを個人的に知り、たえずキリストとまじわっていなければ、敵の思うままになり、ついには敵の命ずるとおりのことを行うようになる。(各時代の希望中巻 40-42)

キリストはことばを続けて、「よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう」と言われた(ヨハネ 14:12)。救い主は、何のためにご自分の神性が人性と結合しているかを弟子たちが理解するように熱望された。……神はキリストのうちにあらわされたが、それはキリストを通して神が人々のうちにあらわされるためであった。……キリストの完全な人性は、キリストに従うすべての者が、キリストと同じように神に服従するときに所有することのできるものである。(各時代の希望下巻 147)

## 第5課 回復するための計画(II)

### 暗闇における光

父祖や預言者たちは、人間のための贖罪の真理（またはあがない代としてのキリストの死）を固く信じていました。アダムの息子であるアベルは、犠牲の小羊の意味を、「世の罪を取り除く神の小羊」の型として理解していました。「アベルもまた、その群れのういごと肥えたものを持ってきた。主はアベルとその供え物を顧みられた。」(創世記 4:4)。

アブラハムは、キリストの贖いの犠牲の性質を理解していること示しました。「この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた。」(創世記 22:13)。

犠牲として捧げられた動物たちは、来たるべき本当の犠牲の象徴にすぎませんでした。

「しかし実際は、年ごとに、いけにえによって罪の思い出がよみがえって来るのである。なぜなら、雄牛ややぎなどの血は、罪を除き去ることができないからである。それだから、キリストがこの世にこられたとき、次のように言われた、『あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった。あなたは燔祭や罪祭を好まれなかった。その時、わたしは言った、「神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました。』」(ヘブル 10:3-7)。

預言者ダニエルは、メシヤが油を注がれる時についてあらかじめ述べていました。その預言は、キリストがバプテスマの時、すなわちこのお方の公生涯の開始時に成就しました。「それゆえ、エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって、建て直されるでしょう」(ダニエル 9:25)。

預言においては、1日は1年を表しています(民数記 14:34、エゼキエル 4:6 参照)。ダニエルの預言では、7週と62週という期間が示されており、合計して69週になります。エルサレムを(バビロンのネブカデネザル王により70年前に破壊されていたが)建て直し、再建せよという命令が出された時から、その完成までに7週間を要し、その後69週間が経過するとキリストのバプテスマに至ります。

そのエルサレムの再建という歴史的な命令は、メデのアルタシャスタ王により

紀元前 457 年に発せられました (エズラ 7:11-26 参照)。そのため、7 週間 (または 49 日 = 49 年) が経過したのは紀元前 408 年、すなわち、ちょうどエルサレムの再建が完成した日に至ります。その後の 62 週 (または 434 日 = 434 年) が経過しますと、ちょうどキリストのバプテスマの日、すなわち紀元後 27 年に至ります。このとき、キリストは聖霊によって油が注がれたのでした。(ルカ 3:21, 22 および使徒行伝 10:38 参照)。

ミカは、キリストが生まれる場所についてあらかじめ述べていました、「しかし、ベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの土族のうちで最も小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る」(ミカ 5:2)。

聖書はイエスが実際にベツレヘム、すなわちダビデの町で生まれたことを示しています。「イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東から来た博士たちがエルサレムに着いていった」(マタイ 2:1)。

キリストに関する裏切り、裁判、死、埋葬、復活について、35 の具体的な預言があるとされています。これらすべては、72 時間のあいだに実現したのです！

わたしたちのあがない代

イザヤは、キリストの残酷な拷問や恥ずべき死について、それが起こる 700 年以上も前にあざやかに描写しています。記録されている預言は、非常に感動的な描写で、一つ一つ詳細において正確なため、イザヤが実際にキリストの苦難を目撃したのだと信じてしまうばかりです。

「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。彼はしえ上げられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと」(イザヤ 53:3-8)。

詩篇の中で、キリストがどのようなかたちで死なれるかについて読むことができます。「わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はあごにつく。あなたはわたしを死のちりに伏させられる。まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた」(詩篇 22:15, 16)。

暑い時間帯に何時間にもわたり激しい苦しみに耐えられた後、イエスの喉が渇いて、「わたしは、かわく」（ヨハネ 19:28）と言われました。残酷な手が人の子の手と足を釘で貫き、それから十字架を掲げて、用意されていた穴に乱暴に落とし込まれました。そのため、イエスのみ手とみ足の傷は裂けて、さらに広がりました！十字架にかかれる前、イエスは、一つの裁判所から別の場所へ連れて行かれ、残酷にたたかれ、嘲笑され、むち打たれたのでした。こうして、イエスは、十字架という残酷な方法で、一般の犯罪者の死にあずからなければなりません。これは、なんとという光景でしょう！罪のない神の小羊が拷問され殺されたのです！親愛なる友人がた、これがあなたのためにキリストが支払われた代価なのです。あなたが生きることができるように、このおかたは自らすすんであなたの身代わりとなり、あなたのために死なれたのです。

「あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」（コリント第一 6:20）。

墮落した人間に対する神の愛は非常に大きかったので、神はそのひとり子をつかわし、すべての人間が直面しなければならぬのと同じように、生命の危機にさらされることをお許しになりました。人間の親はその息子を思いやります。地上の親は、自分の子供をかくまい、誘惑や争いから引き戻して守りたいと切望します。全能の神はわたしたちを救うために、ご自分のひとり子をもっと大きな争いともっと恐るべき危険へさらされたのです！

「あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」（ペテロ第一 1:18,19）。

わたしたちの救いのために支払われた代価は、「キリストの尊い血」です。天のすべての宝は、この一つの「賜物」のうちに注ぎ出されました。これはなんとという代価でしょうか！神の御子を通して神からの無償の救いの賜物を受け入れるすべての人は、神に対して二重に帰属するのです。第一に創造によって、そして第二に贖いによってです。そのような人は、神の賜物なるお方を考えて、使徒ヨハネと共に、次のように叫ぶことでしょう。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。」（ヨハネ第一 3:1）。

キリストは、その死によって何を得られたのでしょうか。聖書には、救いへの道は細く、その門は狭い、そしてそれを見出す者はわずかしかないとあります。ですから、次のような疑問がわいてくるかもしれません、そのような多大な犠牲を払う必要があったのだろうか、救い主は、その犠牲によって何を得られたのだ

ろうか？

人は創造されたときに与えられたこの世の支配権を(創世記 1:26)、悪魔に従うことによって失ってしまいました。しかし、キリストの死と復活により、その支配権が再度、獲得されたのです。神の権限が回復されました。

「羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、以前の主権はあなたに帰ってくる。すなわちエルサレムの娘の国はあなたに帰ってくる」(ミカ 4:8)。

この世は、罪のうちに失われ、そのため神との間で恨みが生じましたが、キリストを通して、神に和解させられました(コリント第二 5:19)。

十字架上で、キリストは悪魔に対して勝利されました。そして、そのとき以来、わたしたちはサタンを敗北した敵とみなすべきなのです。

「このように、子たちは血と肉と共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼすためでした(ヘブル 2:14)。

イエスは、自発的に、ご自身の血によってわたしたちの救いのための代価を支払われ、信仰によってその報いをご覧になりました。「彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。義なるわがしもべはその知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ 53:11,12)。

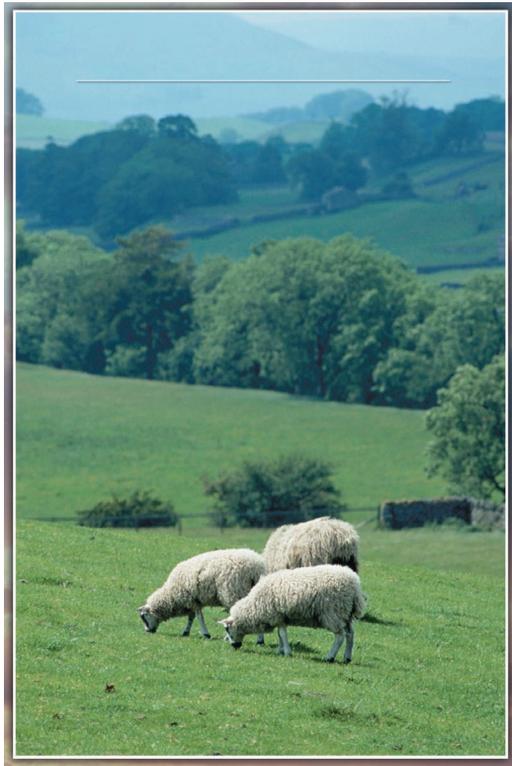
キリストは、わたしたちのために、完全にして完璧な救いを獲得してくださいました。

「彼は、御子であられたにもかかわらず、さまざまな苦しみによって従順を学び、そして全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して永遠の救いの源となり」(ヘブル 5:8,9)。

救い主は、全ての時代の贖われた人々がご自分の栄光の御国でご自分のみ前に立つとき、完全に満足されるのです。救いの計画はその時に完成し、神の全宇宙すべてにわたって、平和と一致が永遠に存続するのです。

## 恐れるな、小さい群れよ

*Fear Not, Little Flock*



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの間となつて下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

7月

7月1日

## キリストかそれともバラバか

「〔ピラトは言った、〕『過越の時には、わたしがあなたがたのために、ひとりの人を許してやるのが、あなたがたのしきりになっている。ついては、あなたがたは、このユダヤ人の王を許してもらいたいのか』。すると彼らは、また叫んで『その人ではなく、バラバを』と言った。このバラバは強盗であった。』（ヨハネ 18:39, 40）

わたしたちは神の御子であるイエスが拒まれ十字架につけられた世、すなわちイエスを軽蔑し、神の傷のない小羊よりも強盗を選んだ罪が置かれている世に、いまだに存在している。わたしたちが個人的に、神の律法の違反のゆえに神に対して悔い改めて、世が拒んだわたしたちの主イエス・キリストに対して信仰を働かせない限り、わたしたちはキリストの代わりにバラバを選んだ行為に相当する罪の宣告をそのまま受けるのである。全世界は今日、神の御子を故意に拒否し、殺害した罪によって告発されている。ユダヤ人と異邦人、王、支配者、牧師、祭司、民一妬み、憎しみ、偏見、神の御子を死に処した者たちによって明らかにされた不信を表すすべての階級と教派は—もし機会が与えられたなら、キリストの時代のユダヤ人と民がしたように、同じ働きを行うであろう。彼らは神の御子の死を要求した同じ精神を共にする者になるであろう。（ビュー・アード・ハルト 1893年8月22日）

イエスは律法の違反者たちを非難せず、譴責しないままに放っておきさえすれば、世と平和でいることができたはずであった。しかし、このお方はそれがおできならなかった。なぜならこのお方は、世の罪を取り除くべきであったからである。忠実な見張り人たちは、平和を乱す者として世によって告発されるのである。彼らは争いを起こし、分離を起こしているという罪状で告発されるようになる。しかし彼らはキリストの上に降りかかった責めを耐えているだけである。キリストは不義を非難され、このお方の存在そのものが罪への非難であった。このお方の魂を取り囲んでいた雰囲気は、非常に純潔で高尚であったので、偽善的なラビ、祭司、支配者たちをその真の状態に置き、神聖を公言しながら神とこのお方の真理を誤って伝えているそのありのままの品性のうちに彼らを表したのであった。キリストの品性の豊かな愛のうちには、神への熱意はつねに明白である。……このお方はただ一つのことを憎まれた。それは罪であった。しかし世は罪を愛し義を憎み、これがイエスに対する世の敵意の原因であった。もしキリストが人々に彼らの悪の激情を及ぼすことを認可したならば、彼らはこの偉大な奇跡を起こすお方を称賛の叫びを持って歓迎したであろう。しかしこのお方が罪を非難し、利己心、圧迫、偽善、誇り、貪欲、肉欲に対して戦いを開始されたとき、彼らは、「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」と言った。（同上 1894年7月24日）

7月2日

## ピラトにやってきたように、圧力は来る

「そこでピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。」(ヨハネ 19:1)

ピラトは驚きと落胆によって唾然とした。しかし、人々に訴えまた自分の裁判権を譲り渡すことによって、彼はすでにその威厳をうしない、群集を治めきれなくなっていた。祭司たちは、彼がイエスの無罪について確信させられてはいるものの、自分たちで脅迫することができるとうかつたので、自分たちの目的を果たす決心をした。(預言の霊 3巻 142)

わたしたちはまだ、過去において各時代に存在していた神と神の民への同じ敵対心が、光と特権を誇っているこの時代にも存在するのを見出すのである。サタンは自分の働きを行うことに忙しくしている。彼の天使たちは、今日の悪人と共謀し、背教の結合した能力は以前に自分たちが築き上げたものを破壊し、真理の擁護者である者たちの影響を壊すために自分たちの勢力を集めるのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1888年9月21日)

もしわたしたちが神を愛しこのお方の戒めを守るなら、わたしたちは世がキリストにしたよりも、わたしたちに賛成することを期待する必要はない。ヨハネは、「世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである」(ヨハネ第一 3:1)そしていつの時代にも、真理の擁護者たちはパウロの言葉の真実を悟ったのである、「いったい、キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。」(テモテ第二 3:12)。真理は人の教理に相反し、彼らの不義の行いを罪に定めるので、それは最も苦い反対を起こすのである。大多数の者たちは、キリストの名を名乗る者たちでさえも、このお方の自己否定と十字架を負う模範に快く従わないのである。そして彼らがこのお方からますます遠ざかっていくとき、彼らは天の事柄と地上の事柄を区別することができない。彼らの平和は神に仕え、すべての罪深い習慣を放棄する民がいるという事実によってかき乱される。神のご要求を踏みにじっている者たちは、このお方に従順を捧げる者たちの進路によってたえまない譴責を感じる。そしてこれがなぜ、そのような敵意が神に真実であるすべての者たちに対して示されるかということである。この理由のため、パリサイ人たちはキリストを拒み、同じ精神が今もなお存在し、時の終わりまで存在し続けるのである。……

こうしたことが、キリストの僕たちが世を愛する教会の教理と調和しない真理を教えるがゆえに、受ける取り扱いである。……教会の権威は、ユダヤの大祭司と律法学者たちのように、彼らをピラトのもとに連れてきて、彼らに対して判決を言い渡し、彼らを投獄するにいたらせたのである。しかしこれらすべてはこれから起こることに比べると、小さい事柄に過ぎない。(SDA ミッション・ヒストリカルスケッチ 195, 196)

7月3日

## 無罪の者が十字架に値するか

「イエスはいばらの冠をかぶり、紫の上着を着たままで外へ出られると、ピラトは彼らに言った、見よ、この人だ。祭司長たちや下役どもはイエスを見ると、叫んで十字架につけよ、十字架につけよと言った。ピラトは彼らに言った、あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない。」(ヨハネ 19:5, 6)

キリストは教会において最高の任務に就いている者たち、このお方が彼らの父たちをエジプトのくびきから救い出した者たちによって、激しく非難された。世の光となるように神によって選ばれた民はサタン黒い旗のもとに立ち、自分たちが長い間待望していたメシヤを非難し圧迫したのである。このように彼らは自分たちの破滅を自分の身にもたらした。軽蔑を示す彼らの言葉は彼ら自身に影響を及ぼした。この世のわがは、何という暗黒を舞台の主役たちにもたらしたことであろう。二度とその記憶は彼らの思いから消え去ることはなかった。(サインズ・オブ・タイムズ 1900年1月31日)

まもなくキリストが払おうとされていた犠牲によって、すべての疑いは永遠に解決する。そして、もし人類が自分たちの忠誠に戻るならば、彼らは救われるのである。キリストだけが神の政府に誉れを取り戻すことができる。カルバリーの十字架は、墮落していない諸世界によって、天の宇宙によって、サタンの使いによって、墮落した人類によってながめられ、そしてすべての口はふさがれるのである。ご自分の無限の犠牲を払われることにおいて、キリストは律法を高め誉れを帰せられる。このお方は、罪深い状態の人間に合わせるために、多少なりとも変えられることができなかつた神の政府の高められた性格を明らかにされたのであった。

だが、キリストの地上でのご生涯の最後の場面、法廷でのこのお方の裁判、またこのお方の十字架を描写することができるだろうか。だが、これらの場面を目撃したであろうか。天の宇宙、父なる神、サタンと彼の天使たちである。キリストの裏切りにおいてすばらしい出来事が起こった。このお方の欺きの裁判において、このお方を告発する者たちは、このお方が有罪であることを証明できるものを何も見出さなかつた。三度ピラトは、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない」と宣言した(ヨハネ 18:38)。それにもかかわらず、彼はこのお方をむちで打つように命じ、考案することのできるうちで最も残酷な死を苦しむようにこのお方を引き渡したのである。……全天の司令官に対する反逆者たちの敵意が明らかにされなければならない。サタンのあわれみとは残酷さであることが示されなければならないのである。これはキリストとサタンとの間の、何という戦いだったことであろう。その戦いはよみがえりのときまで、しかり、昇天の時までも続けられたのであった。そしてそれはキリストに従う者たちへと移され、今日サタンは彼らに対して戦っているのである。(同上 1899年7月12日)

7月4日

## 野心によって押し流される

「そこでピラトは〔イエスに〕言った、何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか。イエスは答えられた、あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい。これを聞いて、ピラトはイエスを許そうと努めた。しかしユダヤ人たちが叫んで言った、もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です。ピラトはこれらの言葉を聞いて、イエスを外へ引き出して行き、敷石（ヘブル語ではガバタ）という場所で裁判の席についた。」（ヨハネ 19:10-13）

〔ピラト〕は政府から疑いの目で見られていたので、自分の側の不誠実の報告はおそらく自分の地位を危うくすることを知っていた。彼はもしユダヤ人が自分の敵になれば、彼らの手から何の容赦も望むことができないことを知っていた。それは、自分の目の前に、彼らが理由もなく憎んでいる者を滅ぼそうとねらっている例があったからである。

カイザルへの彼の忠誠に関する祭司たちの宣言の中にほめかされた脅迫は、ピラトをおびやかしたので、彼は暴徒の要求に譲歩し、自分の地位を失う危険より、イエスを十字架に引き渡したのである。しかし、彼の用心にもかかわらず彼の恐れていたことが後になって起こった。彼の名誉ははぎとられ、高い地位から下ろされ、悔恨と傷つけられた誇りに苦しみながら、十字架の後間もなく自ら命をたったのである。……

つい少し前に、総督は囚人に自分は彼を釈放する権利があり、罪に定める権利を持っていることを宣言した。しかし今、彼はこのお方を救い、それと共に自分の地位と名誉を保つことができないと考えた。そして、彼は自分の世俗的権威よりも、無実なお方の命を犠牲にすることを選んだ。もし最初に、彼が自分が正しいと信じた確信通りに実行し、即座にまた確固として行動していたなら、彼の意志は暴徒たちによって押しつぶされなかったであろう。彼らはあえて彼に命令しようとはしなかったであろう。彼のためらいと優柔不断は、彼の取り返しのつかない破滅を実証した。ピラトのように好ましくない結果をまぬかれるために、原則と高潔を犠牲にする者がどんなに多いことだろう。良心と義務は一つの方向を指し示し、利己心は他の方向を指し示す。潮流は間違った方向へ強く流れて、悪と妥協する者を罪という深い暗闇へ押し流すのである。（預言の霊 3 巻 146, 147）

7月5日

## 異教の支配者の方を選ぶ

「その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピラトはユダヤ人らに言った、見よ、これがあなたがたの王だ。すると彼らは叫んだ、殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ。ピラトは彼らに言った、あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか。祭司長たちは答えた、わたしたちには、カイザル以外に王はありません。」(ヨハネ 19:14, 15)

ユダヤ人たちが、贖いのおよばないところで彼ら自身の運命を定めているのをごらんになって、キリストはどれほど悲しまれたことであろう。このお方だけが彼らの神の御子への拒絶、裏切り、罪の宣告の意義を理解することができた。なにもその運命を防ぐことができなかつた。国民の代表者によって神は彼らの支配者として否定された。墮落していない世界によって、全宇宙によって、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」という冒瀆的な言葉が聞かれた(ヨハネ 19:15)。天の神は彼らの選択を聞かれた。このお方は彼らに悔い改める機会を与えられたが、彼らは悔い改めようとはしなかつた。四〇年後、エルサレムは破壊され、ローマの権力が民を支配した。その時、彼らを救う者はいなかつた。彼らはカイザル以外に王がいなかつた。それから後、ユダヤ国民は、国家として、ぶどうの木から切り離された枝一焼かれるために集められる、枯れた、実を結ばない枝一世界中のあちらこちらで、幾世紀にもわたって救い主なく、罪とがのうちに死んでいる枝となつたのであつた。(ユーストラー 1900年2月1日)

ユダヤの大祭司職は、カヤパをもって終了した。この誇り高く横柄な愚か者は、自分が大祭司の衣を着る価値のない者であつたことを証明した。働きをすることに関して、彼は天からの能力も権威も持っていなかつた。祭司の働きとは何なのか、また役職が何のために設立されたかを示す、神からの光を彼はひとすじも持っていなかつた。それ自体が全く墮落していたので、そのような祭司の職務はなにもも完全にすることができなかつた。……

事実上、カヤパは大祭司ではなかつた。彼は祭司服を着ていたが、神との生きたつながりを持っていなかつた。彼は心に割礼を受けていなかつた。他の大祭司と共に、彼は人々にキリストの代わりにバラバを選ぶようにと指図した。彼らはキリストを十字架につけるようにと叫んだ。ユダヤ国民の代表者として、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」と言うことによって、彼らを自分たちが嫌っていたローマの支配下に置いた。彼らがこのように言ったとき、彼らは自ら教会の資格を失つたのである。

国民を高めるのは義である。神の律法に対する無関心は、この地上歴史の最後の時代における宗教界の破滅になるであろう。すべてが不安定になってきているが、神の言葉は不変であり確かである。(原稿 12 巻 387, 388)

7月6日

## 多数派に従うか、十字架を負うか

「こうしてイエスを嘲弄したあげく、外套をはぎ取って元の上着を着せ、それから十字架につけるために引き出した。彼らが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に負わせた。」(マタイ 27:31, 32)

出血と過度の疲労で、〔救い主〕は気を失って地面に倒れた。十字架の重荷の下に横たわれたとき、このお方の母の心は、このお方の傷ついた頭の下にささえの手を差しのべたい、かつては自分の胸に抱かれたあの額を洗ってあげたいとどれほど願ったことであろう。しかし、悲しいかな、その悲しみの特権は与えられなかった。

イエスが再び起きられると、十字架はもう一度このお方の肩にのせられ、前進するように強いられた。このお方は重荷を負われながら、二、三步よろめきながら歩かれてから死んだ者のように地面に倒れてしまわれた。祭司と支配者たちは苦しんでいる犠牲者には何の哀れみも感じなかったが、このお方はこれ以上拷問の道具を運ぶことが無理であることを見た。彼らは死刑執行所まで十字架を負うほどの屈辱に甘んじる者を探すのに困惑した。

彼らがどうするか考えていたとき、クレネ人のシモンが反対方向から向かってきて群集に行き会い祭司たちの扇動に捕らえられ、キリストの十字架を運ぶように強いられた。シモンの息子たちはキリストの弟子であったが、彼自身は今までこのお方と接触したことがなかった。この出来事は彼にとって有益であった。彼の同情はイエスを支持するように深く動かされた。そしてカルバリーでの出来事と、救い主によって語られた言葉は彼にこのお方が神の御子であることを認めさせた。シモンはイエスが世の贖い主であるという証拠を自分で受け入れる境遇に置かれたこの摂理を、その後いつも神に感謝した。

多くの群集がカルバリーまで救い主に従った。多くの者たちは嘲り嘲笑していたが、ある者たちは涙を流し、このお方の誉れを思い起こしていた。このお方によって数々の病から癒された者たち、このお方によって死からよみがえらされた者たちは、このお方の驚くべき御業を真剣な声で宣言し、イエスが悪人として取り扱われるべきどんなことをなされたかと問い詰めた。つい数日前、彼らはイエスがエルサレムに凱旋的な入城をされたときに歓喜のホサナを叫び、シュロの枝を振ってこのお方に付き添ったのである。しかし、みんながそうしているからというので、その時主を高らかに賛美した者たちの多くは今、「十字架につけよ！十字架につけよ」という叫びを張り上げるのであった。(現代の真理 1886年1月7日)

7月7日

## イエスはおとなしく従われた

「彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。」(ヨハネ 19:18)

準備はなされて、イエスは十字架の上に横たえられた。金づちと釘が運ばれてきた。弟子たちは、気を失いそうになった。イエスの母は、耐えきれない苦悩に身をかがめた。弟子たちは、救い主が十字架に釘づけにされる前に、その場から彼女を連れ出し、彼の柔らかい手と足の骨や筋肉に釘が打ちこまれる大きな音を聞かすまいとした。イエスは、つぶやかれなかったが、苦痛のあまりうめき声を出された。彼の顔は青ざめ、その顔には、大きな汗のしずくが浮かんでいた。サタンは、神のみ子の苦悩を見て狂喜したが、救いの計画を妨害する彼の努力が無駄になり、彼の王国は失われ、彼はついに滅びなければならないのではないかと恐れた。……

イエスが、十字架に釘づけられたあとで、それは持ち上げられ、すでに地面に用意されてあった場所に勢いよく突き立てられたので、肉を引き裂いて、耐えがたい苦痛を与えた。イエスの死を、できるだけ屈辱的なものにするために、ふたりの強盗がイエスと一緒に、ひとは右に、ひとは左に、十字架につけられた。強盗たちは、激しく抵抗して、力づくで押えられ、腕を広げられて十字架に釘づけられた。しかし、イエスは、おとなしく従われた。十字架の上に彼の腕をのばしておさえる者は、だれもいらなかった。強盗たちが処刑者たちをのろっていたときに、救い主は苦悩のさなかで、ご自分の敵たちのために「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と祈られた(ルカ 23:34)。キリストが耐えられたのは、単に肉体の苦痛だけではなかった。全世界の罪が、彼の上に置かれた。

イエスが十字架にかかっておられたとき、そこを通りかかった者たちは、あたかも王に頭を下げるかのように頭をふりながら、イエスをののしって言った。「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」(マタイ 27:40)。サタンは、荒野で、キリストに同じ言葉を用いて、「もしあなたが神の子であるなら」と言った(ルカ 4:3)。祭司長たち、長老たち、律法学者たちは、嘲弄して、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」と言った(マタイ 27:42)。キリストの十字架の場面の上空を飛びかっていた天使たちは、役人たちが、「彼は他人を救ったが、自分自身を救うことができない」と言ったときに、憤りをおぼえた。彼らは、そこでイエスを助けに来て、彼を救い出したいと願ったが、そうすることは許されなかった。彼の任務の目的は、まだ達せられていなかった。(初代文集 300-302)

7月8日

## ゴルゴダ

「彼らにはがみをまぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはそれをなめただけで、飲もうとされなかった。彼らはイエスを十字架につけ」(マタイ 27:34, 35)

キリストの地上でのご生涯の使命は、ほとんど成し遂げられた。このお方の舌は渴き、「わたしは、かわく」と言われた(ヨハネ 19:28)。彼らは酢と胆汁を海綿に含ませて、このお方に差し出した。そしてこのお方はそれをなめただけで、飲もうとされなかった。そしていまや、命と栄光の主は、人類のための贖い代として死のうとしておられた。このお方が飲まれた杯をこれほどまでに苦くし、神の御子の心臓を破ったのは、人の身代わりとしてこのお方の上に御父の怒りをもたらした罪についての意識であった。死は憐れみの天使として見なされるのではない。自然は、罪の結果である消滅という考えにひるむのである。

しかし、言い表しようのないイエスの苦悩を引き起こしたのは、死の恐怖ではなかった。そう信じることは、このお方を勇敢さと忍耐において殉教者に及ばないものになる。なぜなら自分たちの信仰のために死んだ多くの者たちは、拷問と死に屈服し、キリストのために死ぬのに価値ある者と見なされたことを喜んだのである。しかし、恐怖と絶望でこのお方を満たしたのは肉体的苦悩ではなかった。それは、罪の悪性についての意識、すなわち人間は罪と親しむことによって、その非道さを悟らなくなったので、罪は深く人の心に食い込み、その力を断ち切ることが難しくなったという知識であった。

人の身代わりまた保証人として、人の不義がキリストのうえに置かれた。律法ののろいから彼らを贖うために、このお方は罪人として数えられた。各時代におけるアダムの子孫の全体的不義が、キリストの心に重くのしかかった。そして、神の怒りと、不義のゆえのこのお方の不興の恐ろしいあらわれが神の御子の魂を非常な驚きで満たした。この最高の苦悩の時に神のみ顔が見えなくなることは、救い主の心を人には決して完全に理解されることのできない悲しみによって刺し通した。十字架上で神の御子によって耐えられた痛みの一つ一つ、このお方の頭と手と足から流れた血のしたたり、このお方の身体を苦しめた苦悩の痙攣(けいれん)、そして御父の御顔が隠されたときに、このお方の魂を満たした言い表しようのない苦悩は、人に、神の御子がこれらの憎むべき犯罪がご自分の上に置かれることを承諾されるのはあなたに対する愛のためであり、死の支配をたちきって、パラダイスと永遠の命の門を開かれるのはあなたのためであると語っている。(預言の霊 3 卷 162, 163)

## 自分の救い主を認めた者

「十字架にかけられた犯罪人のひとりが、あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよと、イエスに悪口を言いつけた。もうひとは、それをたしなめて言った、おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない。そして言った、イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください。イエスは言われた、よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。」(ルカ 23:39-43)

イエスは悔い改めたどろぼうに、彼らが十字架につけられた日にパラダイスにご自分といっしょに行くことを約束されたのではなかった。なぜならご自身も三日後までは、御父のもとに昇っていかれなかったからである。ヨハネ 20:17 を読みなさい。しかしこのお方は彼に「きょう、あなたに言っておくが」一屈辱と迫害を耐えているその時に、このお方は罪人を救う力があるということ的印象づけるために宣言されたのである。このお方は父にとりなす人間の弁護人であり、病人を癒して死人を命へよみがえらされたときと同じ力を持っておられた。その日に、悔改めた者、信じる悪人に、「わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と約束されることはこのお方の神の権利であった。

十字架上の犯罪者は、自分の肉体的苦しみにもかかわらず、心のうちに平安と神に受け入れられたという慰めを感じた。十字架上にあげられ、痛みと嘲りに耐え、祭司と長老たちから拒まれた救い主を、罪のある死にかけた魂が、悪人として十字架につけられているお方のうちに世の贖い主を認める信仰をもって求めた。そのような対象のために、失われ滅び行く罪人を救うために神の御子は天国を去られたのである。祭司と支配者たちが、自分たちの自己義のあざ笑いのうちにこのお方の神性の品性を見ることを怠った一方で、このお方はご自身を悔い改めたどろぼうに罪人の友また救い主として現された。このお方はそのように、この上ない罪人がキリストの血の功績を通して許しと救いを見出すことができることを教えられる。

神の霊は、信仰によってキリストをつかんだこの犯罪者の思いを啓発させられた。……指導者であるユダヤ人たちがこのお方を拒み、弟子たちでさえもこのお方の神性を疑ったのに、この哀れなどろぼうは永遠の瀬戸際、彼の恩恵期間の終わりにおいて、イエスを自分の主と呼ぶのである。多くの者はこのお方が奇跡を行い、また墓からよみがえられた後には喜んでこのお方を主と呼んだ。しかし、このお方が十字架上で死のうとしておられるときには、この5時に救われた悔い改めたどろぼうのほかにも、だれ一人としてこのお方を主と呼んだ者はいなかったのである。(預言の霊 3 巻 157, 158)

7月10日

## 殺したのは、押しつぶすような重圧

「さて、昼の十二時から地上の全面が暗くなって、三時に及んだ。そして三時ごろに、イエスは大声で叫んで、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言われた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」(マタイ 27:45, 46)

十字架上でキリストの生命をそれほど早く終わらせたのは、肉体的苦痛ではなかった。それは世の罪におしつぶされそうな重荷、またご自分の御父の怒りの意識であった。……

血を流し、死んでいかれる創造主に非情の自然界が同情のうちにうめいた。地は震える。太陽はその光景を見ることを拒む。天は暗黒を集める。天使たちは苦悩の場面を目撃したが、それ以上見ることができなくなり、恐ろしい光景から顔を覆った。キリストが死のうとしておられる!このお方が悩んでおられる。このお方の御父は笑みが取り去られることを承認なさり、天使たちは恐ろしい時間の暗闇を明るくすることを許されなかった。彼らは自分たちの愛する司令官、天の大能者が御父の律法への人の違反の報いを苦しまれるのを驚きのうちにただ眺めることしかできなかった。

疑いさえ、死につつある神の御子を襲った。このお方は墓の入り口から奥を見通すことがおできにならなかった。このお方が征服者として墓から出てこれることや、犠牲が御父に受け入れられることについての輝かしい望みは与えられていなかった。世の罪が、その全ての恐ろしさとともに、神の御子によって極限まで感じられた。罪に対する御父の不快、またその報いである死が、この驚くべき暗闇を通してこのお方が悟ることのできることであった。このお方は、罪がそれほど御父の御眼には不快なものであるため、ご自分の御子と和解されることができないかと恐れるように誘惑された。ご自分の御父が永久にご自分を去られたという激しい試みは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という胸を貫くような叫びをひき起こした(マルコ 15:34)。

キリストは神の怒りの杯が罪人の上に注がれるときに、彼らを感じるのとまったく同じように感じられたのであった。黒い絶望が死のとばりのように、罪深い彼らの魂のまわりに集まり、そのとき彼らは罪の罪深さをこれ以上ないほど十分に理解するようになる。救いは……もし彼らが快く、喜んで受け入れたならそれは彼らのものになったであろう。しかし誰一人として、神の律法へ従順を与えるように強制されていない。もし彼らが天の利益を拒み、罪の快樂と惑わしを選ぶなら、彼らは自分の選択したものを持ち、終わりには神の怒りと永遠の死である彼らの報いを受けるのである。彼らはイエスのご臨在から離されるのである。彼らはこのお方の犠牲を軽蔑したのである。彼らは一時的な罪の快樂のために、幸福な生命を失い、永遠の栄光を犠牲にしたのである。(教会への証 2巻 209, 210)

7月11日

## 栄光によって燃え上がる十字架

「神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。」(コリント第二 5:21)

キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。栄光につつまれたキリストのうちに、彼らは、十字架につけられたキリストを見る。広大な空間に、数えきれないほどの諸世界を、その力によって創造し、支えておられるおかた、神の愛するみ子、天の大君、ケルビムや輝くセラピムが喜んであがめるおかた、そのおかたが、墮落した人類を救うために身を卑しくされたことは、決して忘れられることがない。また彼が、罪の苦痛と恥とを負われ、天父からはそのみ顔を隠されて、ついには失われた世界の苦悩がその心臓を破裂させて、カルバリーの十字架上でその命を絶たれたことは、決して忘れられることがない。諸世界の創造者、すべての運命の決定者が、人類に対する愛から、ご自分の栄光を捨てて、ご自分を卑しくされたことは、いつまでも宇宙の驚嘆と称賛の的となる。救われた諸国民が、贖い主を見て、そのみ顔に天父の永遠の栄光が輝いているのをながめるとき、また、永遠から永遠にいたるイエスのみ座をながめ、イエスのみ国には終わりが無いことを知るとき、彼らはどっと歓喜の歌声をあげて、「ほふられた小羊、ご自身の尊い血によって、わたしたちを神に贖って下さったおかたは、賛美を受けるにふさわしい、賛美を受けるにふさわしい」と叫ぶのである。

十字架の奥義は、他のすべての奥義を説明する。カルバリーから流れ出る光に照らして見るとき、われわれのうちに恐怖と畏敬の念を満した神の属性は、美しい、人を引きつけるものに見える。あわれみ、やさしさ、父としての愛情が、聖潔、公平、力と入りまじって見える。わたしたちは、高くかかげられた神のみ座の威光をながめる一方では、神のご品性の恵み深いあわれみを見て、「われらの父よ」というあの永遠に続く称号の意味を、いままでになく理解するのである。

限りない知恵を持つておられる神は、わたしたちの救いのためには、み子の死よりほかに方法を考え出すことがおできにならなかった。この犠牲に対する報いは、きよく幸福で不死の身となって贖われた者たちを、地に住まわせるという喜びである。救い主が悪の権力と戦われた結果は、贖われた者たちに与えられる喜びであり、永遠にわたって神にみ栄えを帰することである。魂にはこのように大きな価値があるので、天父は、払われた価に満足される。そしてキリストご自身も、その大きな犠牲の実をごらんになって満足されるのである。(各時代の争闘下巻 433, 434)

〔キリストは、〕十字架、残酷で恥ずべき十字架が、それに伴うすべての恐怖とともに、栄光によって燃え上がっているのをご覧になった。(ザイズ・オブ・タイムズ 1897年7月8日)

7月12日

## 生命の与え主がご自分の生命を与えられる

「太陽は光を失い、……そして聖所の幕がまん中から裂けた。そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます。こう言ってついに息を引きとられた。」(ルカ 23:44-46)

信仰と希望が、息絶えようとしておられるキリストの苦悩のうちに震えた。なぜなら神が今までご自分の愛する御子に与えられた、是認と承認の確証を除かれたからであった。世の贖い主はその時、今までご自分を力づけ、ご自分の御父がご自分の働きを受け入れられ満足されたという証拠に頼られた。死ぬ直前の苦悩のうちにあって、ご自分の尊い生命を手放されるときに、このお方は信仰によってのみ、いつも従うことがご自分の喜びであったお方に信頼しなければならぬ。このお方を励ますははっきりした輝かしい望みの光線は右にも左にもない。すべてが重苦しい暗黒に包み隠されている。同情する自然によって感じられた恐るべき暗闇のただなかであって、贖い主は神秘的な杯の最後の一滴までも飲み干された。……

自然が創造主の苦しみに同情した。持ち上げられた地面、裂かれた岩は亡くなられたお方が神のみ子であったことを宣言した。大いなる地震が起こった。宮の幕が二つに裂かれた。太陽が暗黒のうちに覆われるのを見、地震を足元に感じ、岩が裂かれるのを見て聞いたとき、恐怖が執行者と傍観者を襲った。キリストがご自分の霊を御父にゆだねられた時、祭司長と長老の嘲笑いと野次は静まった。驚いた群集は立ち去り、宮に向かって彼らの道を手探りしながら帰った。彼らは恐怖のうちに歩きながら、自分たちの胸をうち、ほとんどささやき声にもならない声で、「殺されたのは無実のお方である。このお方が主張されたように、もし本当に神の御子であられるならどうなるのだろうか」と互いに語った。

イエスはご自分がなすために来られた働きを達成され、息を引き取られるとき「すべてが終わった」(ヨハネ 19:30)と宣言されるまでは、ご自分の生命を捧げられなかった。サタンはその時敗北した。彼は自分の王国が失われたことを知った。天使たちは、「すべてが終わった」という言葉が発せられたとき喜んだ。イエスの死に依存していた贖いの偉大な計画は、ここまで成し遂げられた。アダムの子たちが、従順なお方の生命を通して、ついに神のみ座まで高められることができるという喜びが天にあった。ああ、何という愛だろう。わたしたちのために罪とされるために、神の御子を地上に送られたとは、何と驚くべき愛だろうか。それは、わたしたちが神に和解させられ、栄光のうちにあるこのお方のすまいでこのお方と共にある生命にまで高められることができるためであった。(教会への証 2巻 210, 211)

7月13日

## 清める血と生ける水

「さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、(特にその安息日は大事な日であったから)、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。そこで兵卒らが出て、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。しかし、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出した。」(ヨハネ 19:31-34)

ピラトも〔ユダヤの指導者と〕同じに、イエスの体を十字架上に一時でも必要以上に残したくなかった。総督の承諾が得られると、死を早めるためにイエスと共に十字架につけられた二人の泥棒の足が折られたが、イエスはすでに死んでおられたので、彼らはこのお方の足を折らなかった。粗暴な兵士たちは、カルバリーへの道において、また十字架上で死なれる間、キリストのお姿と言葉を目撃することによって心を和らげられていたので、キリストの足を折ることによってこのお方を傷つけることをひかえた。このようにして、このお方の骨は折られてはならないと宣言した預言が成就されたのである。また、犠牲が傷がなく完全であることを要求している過越の律法は、神の小羊が捧げられることにおいて成就した。「これを少しでも朝まで残しておいてはならない。またその骨は一本でも折ってはならない。過越の祭のすべての定めにしたがってこれを行わなければならない」(民数記 9:12)。

イエスの死を確かなものにしたかったと思った祭司たちの提案によって、ひとりの兵士が救い主のわき腹にやりを突き刺した。もしこのお方がまだ死なれていなかったとしても、傷を負わせることはこのお方を即死させたであろう。やりによって広く切られた傷口からは、血と水がおびただしくはつきりした二筋となって流れた。……復活の後、祭司たちと支配者たちはイエスは十字架上で死なれたのではなく、失神されただけであり、あとから息を吹き返されたのだという噂をまきちらした。もう一つのうわさは、墓におかれたのは骨と肉のある本当の肉体ではなくて、肉体にみせかけたものであったと断言した。しかし、イエスの刺し通されたわき腹について、血と水が傷口から流れたというヨハネの証はこれらの嘘が偽りであることを証明している。(預言の霊 3 卷 171, 172)

血は彼の名を信じる者の罪を洗い去るためであり、水は、信じる者が生命を得るためにイエスから受ける生ける水を代表していたのである(初代文集 349)

7月14日

## 名誉ある葬り

「〔アリマタヤのヨセフ〕がピラトのところへ行って、イエスのからだの引取り方を願い出て、それを取りおろして亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた。この日は準備の日であって、安息日が始まりかけていた。イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが見られる様子を見とどけた。そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。」(ルカ 23:52-56)

女たちは高貴で裕福な議員たちであるヨセフとニコデモが、自分たちと同じようにイエスのお体を適切に処置することに心をかけ関心を持っていることを見て驚いた。

二人ともこのお方を信じていたが、彼らのうち一人も救い主の在世中には、公然とこのお方に伴わなかった。彼らは自分たちの信仰を宣言すれば、イエスに対する祭司たちと長老たちの偏見のために、サンヒドリンの議会から除名されることを知っていた。そうなれば、議会における自分たちの影響力を行使することによってこのお方を助け、守るための力は彼らから一切断ち切られてしまうのであった。数回彼らはこのお方を罪に定める根拠の虚偽を示し、このお方を捕らえることに対して異議を申し立てたので、召集されたための目的を果たすことなしに、議会は解散された。なぜならサンヒドリンの全員の同意がなければ、イエスを罪に定めることは不可能であったからであった。ヨセフとニコデモが呼び出されなかった秘密の議会を召集することによって、ついに祭司たちの目的が達成された。

二人の議員たちはいま大胆に弟子たちを助けるためにやってきた。これらの裕福で高貴な人たちの助けが、このとき非常に必要だった。彼らは、死なれた主のために、貧しい弟子たちができないことをすることができた。それに、彼らの富と勢力は非難と抗議から彼らを守るのに非常に役立った。キリストの認知されていた弟子たちがこのお方に従う者たちであることを公然と示すことにすっかり気落ちし怖気づいていたときに、これらの人たちは大胆に前面に出てきて自分たちの気高い役割を果たした。

ていねいにうやうやしく彼らは、自分たちの手でイエスのお体を拷問の道具から下ろした。傷つき引き裂かれた主のお体を見たとき、彼らの同情の涙が流れ落ちた。そのお体を彼らは注意深く洗い血の染みを洗い落とした。ヨセフは岩に掘られた新しい墓を持っていた。これは自分のためにとっておいたものであったが、カルバリーの近くにあったので、いま彼はその墓をイエスのために準備した。(預言の霊 3 巻 175, 176)

7月15日

## だれも命の与え主を制限できない

「あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。ですから、三日目まで墓の番をするように、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み出し、『イエスは死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふらすかも知れません。そうなると、みんなが前よりも、もっとひどくだまされることになりましょう。ピラトは彼らに言った、番人があるから、行ってできる限り、番をさせるがよい。そこで、彼らは行って石に封印をし、番人を置いて墓の番をさせた。」(マタイ 27:62-66)

ローマ軍の訓練は非常に厳しいものであった。自分の持ち場において眠っているところを見つげられた番兵は、死によって罰せられるのであった。ユダヤ人たちはそのような見張りを、イエスの墓の周りに持つ利点を悟った。彼らは墓が知らない間に荒らされることのないように、墓をふさいでいる石の上に封印した。そして、弟子たちがイエスのお体に関してどんな詐欺も行うことのないようにすべての用心をした。しかし、彼らのすべての計画と警戒は、よみがえりの勝利をさらに完全なものとし、さらにその真実を完全に確立するために役立ただけであった。

神とこのお方の聖天使たちは、世の贖い主のお体を守るためのこれらすべての準備をどのように見られたことであろうか。これらの努力はなんと弱々しく愚かに思われたことであろうか。詩篇記者の言葉はこの場面を描写している。「なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたち、もろもろの民はむなしい事をたくらむのか。地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者にと逆らつて言う、『われらは彼らのかせをこわし、彼らのきずなを解き捨てるであろう』と。天に座する者は笑い、主は彼らをあざけられるであろう」(詩篇 2:1-4)。ローマの番兵もローマの軍隊も、生命の主を墓の狭い囲いの中に閉じ込めておくには無力であった。キリストは命を捨てて、それを再び得る力を持っていると宣言された。このお方の勝利の時が迫っていた。……

いにしえより綴られてきた靈感を受けた預言は、わたしたちの世界へのキリストの来臨を指し示し、このお方が受け入れられる様態を詳細に描写している。救い主が世の歴史の初めの期間において現れたなら、遠い将来にまで及んでいる預言を深く考えることによって彼らの信仰は発達させられ力づけられてこなかったので、クリスチャンに得られた利益はそれほど大きくなかったであろう。(預言の霊 3 巻 179, 180)

7月16日

## 初穂であられるキリスト

「さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。すると、大きな地震が起った。それは主の使が天から下って、そこにきて石をわきへころがし、その上にすわったからである。その姿はいなづまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。この御使は女たちにむかって言った、恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんください。」(マタイ 28:1-6)

天使のひとりが、大きな石に手をかけて墓所の入口からころがし、その上に腰かけた。もうひとりの天使は、墓にはいって、イエスの頭から布をとり去った。天からきた天使は、そのとき地をゆるがす大声で、「神のみ子よ、父があなたを呼んでおられます。出てきてください」と叫んだ。死はもはやイエスを支配する権を保つことができなかった。イエスは、勝ち誇った勝利者として、死から立ち上がられた。天使の軍勢は、厳粛なおそれをもって、その光景を見守った。イエスが墓から姿を現わされると、光かがやく天使たちは地にひれふしてイエスを拝し、勝利の凱歌をあげて歓呼した。

サタンが悪天使たちは、善天使たちの鋭く輝く光の前に、逃げうせなければならなかった。彼らは虜にしていたイエスをむりに奪いとられ、あんなに憎んでいたイエスが死からよみがえったことについて、王のサタンに激しく不平を言った。サタンと悪天使たちは、墮落した人類に対する彼らの権力によって生命の君を墓に横たわらせることができたことを、得意になってよろこんでいたが、彼らの悪魔的な勝利のよろこびもつかのまだった。イエスが偉大な勝利者として獄から歩いて出てこられたとき、サタンは、ある時期がすぎると自分は死なねばならないことや、自分の王国が、正当な権利をもっておられるイエスの手に移らねばならないことを知った。あらんかぎりの努力をしたにもかかわらず、イエスはうち負かされるどころか、かえって人類のために救いの道を開き、その道を歩む者はだれでも救われるようになったことを、サタンは嘆き、怒った。(初代文集 309, 310)

神の御子の復活のこの場面において、天の雲に乗っておいでになるキリストの再臨のときの全般的な義人の復活で見せられる、輝かしい生き生きとした描写がなされている。その時墓の中にいる死人たちは、キリストの声を聞いて生命へと起き上がる。地上だけでなく、天体そのものが揺れ動くであろう(預言の霊 3巻 193)

7月17日

## 嘘はたやすく論駁される

「女たちが行っている間に、番人のうちのある人々が都に帰って、いっさいの出来事を祭司長たちに話した。祭司長たちは長老たちと集まって協議をこらし、兵卒たちにたくさんの金を与えて言った、弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだと言え。万一このことが総督の耳にはいっても、われわれが総督に説いて、あなたがたに迷惑が掛からないようにしましょう。そこで、彼らは金を受け取って、教えられたとおりにした。そしてこの話は、今日に至るまでユダヤ人の間にひろまっている。」(マタイ 28:11-15)

天使の軍勢が墓所から離れ去り、光と栄光が消えうせると、ローマ人の番兵たちは、おそろおそろ頭をあげてまわりをみまわした。あの大きな石が墓所の入口からころがされ、イエスのなきがらは見えなくなっているのに気がついて、彼らは仰天した。彼らは自分たちが見た通りのことを祭司や長老たちに知らせるために、町へ急いだ。虐殺者たちは驚くべき知らせを聞いて、だれも彼も色を失った。彼らは自分たちのしたことを思っ、恐怖にとりつかれた。知らせが事実だとすれば、彼らは滅びてしまう。しばらくの間、彼らはどうしたらよいのか、どう言ったらよいのかかわからないで、ただ顔を見合わせたまま黙ってすわっていた。その知らせを信じることは、自分たち自身に罪の宣告をくだすことになる。彼らはしりぞいて、どうしたらよいかを相談した。番兵たちのもってきた報告が、もし民衆の間にひろがるようなことにでもなったら、キリストを死刑にした者たちは、虐殺者として殺されてしまうだろうと彼らは推測した。そこで兵士たちを買収して、この事を秘密にしておこうときめた。祭司と長老たちは、多額な金銭を兵士たちに提供して、「『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』」と言った。番兵たちは、任務について眠ったということになると、どんなことになるのだろうかとたずねたが、ユダヤの役人たちは、総督を説得してお前たちの身の安全を保証してやると約束した。金銭のために、ローマ人の番兵たちは名誉心売り、祭司と長老たちの勧めに従うことを承知した。(初代文集 311, 312)

偽りのうわさを遠近に広めた。しかし、祭司たちが沈黙させることのできないキリストのよみがえりの証人たちがいた。ある死者たちはキリストと共によみがえって、多くの人々に現れ、キリストがよみがえられたことを宣布した。キリストご自身がよみがえられた後、弟子たちと四十日の間残られ、昇天の前に[このお方は]彼らに彼らの使命を与えられ、全世界に出て行ってすべての造られたものに福音を宣べ伝えるように命じられた。(上を仰いで 263)

7月18日

## 責任をゆだねられる

「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスはいってきて、彼らの中に立ち、安かれ、と言われた。そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスはまた彼らに言われた、安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう。」(ヨハネ 20:19-23)

[弟子たち]はキリストのみ名によって教え、宣べ伝えるのであった。彼らに与えられた指示には、キリストのうちにある命と霊の息吹が含まれていた。……キリストが弟子たちに吹きかけられた息は真の霊的生命の息であった。純潔において、信仰と従順において律法を高め、それを誉めるものとするができるように、弟子たちは彼らの救い主の属性によって吹き込まれているとこれを解釈するべきであった。神の律法はご自身の品性の表現である。その要求に対する従順によって、わたしたちは神の品性の基準にかなうのである。そのようにして弟子たちはキリストのために証するべきであった。

御霊を与えることはキリストの生命そのものを与えることであり、それは弟子たちに彼らの使命への資格を与えるのであった。……ここで弟子たちに与えられた教訓は、神について真に教えられ、聖霊のうちにおける働きかけを持つ賢い者は代表者として、信者全体の見本として行動するべきであることを意味している。これらの者たちは、自分たちが当然の秩序を保つことができることを示すべきである。そして聖霊は罪について、義について、裁きについて目を開くのである。しかし罪を許すことは、神だけの大権として理解されるべきである。マタイの7章にある警告は、人が自分の同胞に裁きを下すことを禁じている。神はご自分の僕たちに、倒したり滅ぼしたりする権力を与えておられない。使徒たちはどの魂からも罪を除くことはできなかった。彼らは、偽ることについて、安息日を破り、偽証をし、盗みをし、姦淫をすることについてのこのようにこう書いてある一主はこういわれたという、神から使命を与えるべきであった。(レビュー・アソッド・ヘラド 1899年6月13日)

責任ある地位を占める者たちは、彼らの兄弟たちの支持と信頼を得るべきである。彼らは他の人々と共通の欠点を持っているかもしれない。また、彼らの判断において誤るかもしれない。しかしそれにもかかわらず、地上における神の教会は彼らに軽んじることのできない権威を与えたのである。(ハイブルエー 1888年9月1日)

## 疑いをイエスに向ける

「トマスは彼らに言った、わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない。八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがいってこられ、中に立って、安かれ、と言われた。それからトマスに言われた、あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのぼしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。トマスはイエスに答えて言った、わが主よ、わが神よ。イエスは彼に言われた、あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである。」(ヨハネ 20:25-29)

弱く揺れ動く信仰を持っている多くの者たちは、もし、トマスが仲間から与えられたような証拠を自分たちにも与えられるなら、自分たちは彼のように疑わないと結論づける。彼らは、その証拠が与えられているだけではなく、それに加えて証が四方八方に積み上げられていることを悟らない。トマスのように、疑いの原因が全部除かれるのを待っている人々の多くは、彼のようにその願いを悟らないかもしれないばかりか、自分たちの不信のうちにだんだん固まってしまい、イエスを指示する証拠の重さを認めることができなくなってしまうのである。そして疑いを抱くユダヤ人たちのように、彼らが持っている少ししかない光は、彼らの思いを囲む暗闇の中に消えていくのである。神の真理の明白で完結的な証拠を拒絶することは、心を硬くし理解力を盲目にする。尊い光は、無視されると、それを快く受け入れない思いから全く消え去るのである。

イエスは、トマスの扱いにおいて、宗教的真理に疑いを抱き、それらの疑いを露骨に表す人たちをどのように扱うべきかという教訓を、ご自分に従う者たちに与えられた。イエスは叱責の言葉でもってトマスを圧倒したり、彼と言い争ったりするようなことはなさらず、きわだったへりくだりとやさしさでもって、疑う者にご自身を現されたのであった。トマスは唯一の信仰の条件を決めつけることで、もつとも理不尽な立場をとったが、イエスはその寛容な愛と思いやりによって、彼が作ったすべての壁を壊された。執拗な言い争いが不信を和らげるようなことはほとんどなく、かえって自己防衛に至らせ、新しい裏づけと弁解の口実を与えるであろう。十字架にかかれた救い主として、その愛と憐れみのうちに現されるイエスは、かつては気の進まなかった多くの人の唇に、「わが主よ、わが神よ」と言わしめるであろう(ヨハネ 20:28)。(パウル・マンタ [E・G・初ト・コメント] 5巻 1151)

7月20日

## 悔い改めた者が回復される

「彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか。ペテロは言った、主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです。イエスは彼に、わたしの小羊を養いなさい、と言われた。またもう一度彼に言われた、ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか。彼はイエスに言った、主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです。イエスは彼に言われた、わたしの羊を飼いなさい。イエスは三度目に言われた、ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか。ペテロは、わたしを愛するか、とイエスが三度も言われたので、心をいたためてイエスに言った、主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています。イエスは彼に言われた、わたしの羊を養いなさい。よくよくあなたに言うておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう。これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してから、わたしに従ってきなさい、と言われた。」(ヨハネ 21:15-19)

ペテロは、自己放棄へと導かれて、完全に神の力により頼むようになったときはじめて、大牧者のもとの働く羊飼いととしての召しを受けた。キリストは、ペテロがキリストを拒む前に、「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と、ペテロに言うておられた(ルカ 22:32)。このみことばは、この使徒がやがて、信仰に導かれるはずの人々のためになさねばならない、広範で効果的な働きのことを意味していた。ペテロ自身の罪と苦しみと悔い改めの経験が、この働きのために、彼を準備させたのであった。彼は自分の弱さを知るまで、キリストにより頼むことの必要を悟ることができなかった。誘惑の嵐のただ中で彼は、人は自己を全く放棄して救い主により頼むときはじめて、安全に歩むことができるということを理解するようになっていた。

キリストと弟子たちが最後に海辺で会ったとき、ペテロは、「わたしを愛するか」と三度くり返して問われ、試されて、十二使徒の座にもどされた(ヨハネ 21:15-17)。彼の働きは既に定められていた。彼は主の羊たちを養うのであった。悔い改め、受け入れられた今、彼は、囲いの外の人々を救う努力をしなければならぬばかりか、羊たちの牧者にならなければならなかった。

キリストはペテロに、奉仕の条件をたった一つだけ言われた、「わたしを愛するか」。これが最も大切な資格である。ペテロに他のものが全部備わっていたとしても、もしキリストを愛する愛がなければ、神の羊たちを牧する忠実な羊飼いになることはできなかった。……キリストへの愛は気まぐれな感情ではなく、生きた原則であり、心の中にある変わることのない力としてあらわれるものである。(レビュー・アンド・ハーランド 1912年7月25日)

7月21日

## このお方のご臨在を通しての力

「イエスは……言われた、わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ 28:18-20)

イエスに従う者は、自分の意志を主人の御旨の側に置くのである。彼は神のご臨在の密接さを自覚する。影が朝日の前に逃げるように、疑いは義の太陽の光線の前に消える。真のクリスチャンは自分の関心をキリストの関心と同一視し、自分の主人のくびきを負い、このお方の重荷を負い、このお方の恥辱を負うのである。しかし、不平が彼の唇から漏れることはない。否、彼は自分のために苦しまれたお方のための苦しみにあずかるにふさわしいものとされたことを喜ぶのである。あなたは不平を予期するかもしれないが、キリストの重荷を負う者たちからは、感謝の言葉しか聞かれないのである。彼らは、一人でその重荷を負うのではない。なぜなら彼らの魂が愛するお方が、彼らと歩まれ、最も重い重荷はこのお方の愛する力強い心によって負われるからである。(サイズ・オブ・タイムズ 1888年1月6日)

わたしたちは神のご臨在がつねに、わたしたちの傍らにあることを自覚すべきである。……このお方はすべての不親切な言葉、すべての鋭い身を切るような表現を聞かれる。このお方がわたしたちの傍に立っているのを見て、そのような言葉を語ることができるだろうか。ねたみや不一致を作り出す言葉は、わたしたちの唇から決して漏れるべきではない。すべての言葉と行動を注意深く見張り、全くへりくだった心のうちに歩み、柔和で親切な精神を抱こう。……すべての思い、すべての言葉は、天の書に記録されている。裁きにおいて自分の記録を見るのを恥ずかしく思うことのないように、あなたの思いと言葉をよく見張りなさい。(同上 1903年2月18日)

もしわたしたちがキリストの御前に生きるなら、論争はなくなるであろう。(同上 1900年9月19日)

〔キリスト〕は、ご自分が始められた働きを続けるための力を、ご自分を愛し畏れる者たちに与えられると、ご自分に従う者たちに保証された。このお方は良い働きをなされ、無学な者を教え、病人を癒しながら巡回された。このお方の働きは病の上にご自分の力を発揮なさることで終わらなかった。このお方は癒しの一つ一つの働きを、心にご自分の愛と慈愛の神性の原則を植えつける機会とされた。このようにしてこのお方に従う者たちは働くべきである。キリストはもはや肉においてはこの世におられないが、このお方はわたしたちにご自分が始められた医療伝道の働きを前進させるようにと任命された。そしてこの働きにおいて、わたしたちは自分たちの最善を尽くすべきである。(ビュー・アノド・バルド 1912年5月2日)

7月22日

## 大いなる任命には制限がない

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」(マルコ 16:15)

この任命を成就することにおいて、なされるべき伝道の働きには何の制限もない。しかし、神の民の側における信仰の欠如のゆえに、この働きは度々ほとんど行き詰まりに至るのである。いくつかの地において達成された働きの記録が何もないということは、真理を信じると公言してきた人々の多くが、自分たちの信仰をその行いによって表してこなかったという事実を証言している。もし神の民が真の伝道精神を持っていたなら、暗黒のうちに横たわっている地は、やがて彼らの自己犠牲的働きによって啓発させられていただろう。……

まだ働きのなされていない大都市が多くある。わたしたちの地にあるすべての教会において、信者たちは真理の種を植えるための最善の場所に導かれることができるようにと、聖霊の導きを求めて熱心な祈りのひと時に従事すべきである。……天の御使たちは世の注目の前に尊い真理をもたらす働きにおいて、人間の器の協力を待っている。わたしたちの諸教会は目を覚まして、自分たちの家庭において主を求め、そしてその後なされるべきことがわかる働きはどんな分野の働きでも取り掛かろうとしないのだろうか。主イエスはご自分の子供たちの必要を知っておられ、ご自分が彼らにできるようにと任命される働きをする資格を彼らに与えられる。このお方の民だと公言する者はみ言葉を学び、どのようにして自分たちが真理がまだ伝えられていない所にそれを最善に紹介することができるか学ぶ必要がある。

神のみ言葉は、それぞれの者に働きを割り当てられたことを明白に宣言している。各自は注意深く祈りを持ってその働きが何であるかを学ぶべきである。全天は魂の救済の働きに興味を持っており、神のみ使いたちは、世にこのお方の御言葉の知識を与える働きを取り上げるすべての働き人の前に行くのである。

キリストはすべての事柄において、わたしたちの模範とならなければならない。人のためのこのお方の働きについての記録は、わたしたちに同胞に対する自分たちの義務を教えるためにあるのである。……神のみ使いたちはわたしたちと共に行き、キリストはわたしたちの教師の長となられ、正しい道がわたしたちの前に開かれるのである。……

神はご自分の民に、彼らのすべての力をご自分の奉仕へと献身するようにと今呼びかけておられる。このお方はすべての家庭が、家庭教会となることを望んでおられる。このお方の真理を信じると公言する者たちが、真に悔い改めるなら、彼らはすべての者たちに語る言葉を持つのである。そしてこのお方の御事業に対する彼らの熱心は、目的と行動において彼らをキリストに似た者とするのである。真の熱心はいつも、柔和と心のへりくだりによって緩和されるのである。……〔神〕はわたしたちにわたしたちの必要を理解され、ご自分の有り余る豊かさから彼らを満たすことができるお方を見上げ、頼るように命じられる。(オーストラリア連合総会記録 1907年 10月 14日)

7月23日

## 地上でのキリストの最後のメッセージ

「さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか。彼らに言われた、時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。」(使徒行伝 1:6-9)

キリストがご自分の弟子たちから別れて、天に上げられる前に彼らに与えられた最後のメッセージは、全世界に福音を携えて行くようにとのメッセージであり、聖霊の約束が伴っていた。……

神との共同者は、わたしたちの世界へのキリストの代表者であり、失われた者たちへの同情と、人の贖いのために魂の苦しみを持つのである。教会がその義務の持ち場に目覚め取り組まない限り、神は魂の損失を教会に求められるのである。(牧師への勧告 198, 199)

教会が小さなことに満足している間は、神の偉大な事柄を受け入れる資格がないのである。しかし、聖霊が、心が清く保たれるための手段であるならば、なぜわたしたちは聖霊の賜物を飢え渇かないのであろうか。主は神の力が人間の努力に協力するようにと計画された。わたしたちの主イエスの再臨に先立って、聖霊の約束の意味を理解することはクリスチャンにとって絶対に欠くことのできないことである。それについて語り、そのために祈り、それについて説教しなさい。なぜなら両親が自分たちの子供たちに良い贈り物を与えるよりも、もっと快く聖霊を与えて下さるからである。(ビュー・アンド・ワールド 1892年11月15日)

主はわたしたちのために個人的になさる特別な働きを持っておられる。わたしたちが世の邪悪さが裁判所において浮き彫りにされるのを見るとき、キリストの恵みがわたしたちのうちに明らかにされるようにと、神に近づき、生きた信仰によってこのお方の御約束をつかもうではないか。わたしたちは世において、感化、力強い感化を持つことができるのである。もし罪を自覚させる神の力がわたしたちと共にあるなら、わたしたちは罪の中にある魂を改心へと導くことができるようにされるのである。……

わたしたちは試みられ試されるのである。わたしたちは眠れぬ夜を過ごすように求められるかもしれない。しかし、このお方が理解力を与え、わたしたちのものである特権を識別するために思いを目覚めさせてくださるようにと、そのような時が神への真剣な祈りのうちに過ごされるようにしなさい。(同上 1909年4月1日)

7月24日

## 天には友が、地には慰め主が

「イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。」(使徒行伝 1:10, 11)

聖天使たちの雲はイエスを天へと付き添って行き、弟子たちは喜んで戻った。なぜ彼らはそんなに喜びに溢れていたのだろうか。イエスが彼らを去られたからではなく、もう一度帰ってこられるという約束のためであった。たった少し前にこのお方は彼らにご自分の父の家には住まいがたくさんあり、彼らのために場所を用意して行き、そして、行ったらまたきて彼らをご自分のところに迎え、このお方がおられる所に彼らをおらせるためであると言われた。天使たちによって新たにされたこの約束は、弟子たちに大いなる喜びを与えた。

わたしたちも同様なことを予期するのである。それはわたしたちの心を望みと喜びで満たすだろうか。もしわたしたちの友達が長旅に出るなら、彼らが戻ってくるという約束はわたしたちに大いなる喜びを与えるのである。わたしたちはこのお方の来臨を喜んでいるだろうか。わたしたちは弟子たちがしたと同じように、共に集まり一つの思いになるべきである。

このお方はもし行かれるなら、慰め主を送られると言われた、そしてこの慰め主は、「あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」と言われた(ヨハネ 14:26)。そして聖霊が彼らの上を下るとき、彼らはこのお方について証言するのである。人間は神の性質にあずかる者となるべきである。しかしあなたが言葉と行動において不注意な間、天につながり他の者たちに光を伝えることは不可能である。真理は心と生活においてなす働きがある。それは受けるものを聖化するのである。……

わたしたちがカルバリーに立てられた十字架を見ると、愛が魂を所有する。それは人の意志を神への従順に至らせる。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」(ヨハネ 14:15)。……キリストが地上におられたとき、人々はこのお方に押し寄せ、このお方の御前において慰められた。このお方が昇天された後、このお方はご自分の約束を果たされた。このお方はすべての信じる、従順な子がどこにしようとも彼と共にいるように慰め主を送られた。

わたしたちはこの世において最も幸福な人々となるべきである。なぜならこのお方がわたしたちのすべてのすべてだからである。このお方はご自分が助言者、導き手、力、支え、また優しい同情する友になると言われた。このお方はわたしたちが必要なすべてであり、すべてにおいて初めてあり終わりであり、最高の方なのである。(説教と談話 2巻 92, 93)

7月25日

## 二階の広間の経験

「〔使徒たちは〕その泊まっていた屋上の間にあがった。その人たちは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモンとヤコブの子ユダとであった。彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた。」(使徒行伝 1:13, 14)

ペンテコステの日の前に弟子たちが主を求めたように、主を求めることはあなたにとって良いことではないだろうか。キリストの昇天の後、このお方の弟子たち一異なったタラントと能力を持った者たち一は聖霊の賜物を祈るために二階の広間に集まった。この部屋において、「彼らはみな、……心を合わせて、ひたすら祈をしていた。」(使徒行伝 1:14) 彼らは自分たちの罪を告白することによって、悔い改めの徹底的な働きをした。彼らには、互に相手の罪を告白する重荷は置かれていなかった。すべての相違と疎外を解決して、彼らは心を合わせて、目的の一致を持って10日の間祈った。(原稿5巻368)

これらの10日間は心を深く調べる日々であった。弟子たちは彼らの間に存在していたすべての相違を捨てて、クリスチャンの友情のうちに互いに近づいた。祈るにつれて、彼らはキリストとそのように近く交わることを許されたことにどれほどの特権があったかを悟った。このお方が、彼らの善のために教えようとなさっていた教訓を理解することを怠ったことによって、このお方の愛の心を幾度となく悲しませたことを思って、悲しみが彼らの心を満たした。(ビュー・アード・ハルド 1908年4月30日)

ああ、わたしたちは神のご臨在を何と必要としていることであろう。聖霊のバプテスマのためにすべての働き人は神に向かって祈りを呼吸するべきである。いくつもの群れが、神に特別な助け、天来の知恵を求めるために、すなわち神の民がどのように働きを計画し、考案し、実行するかを知ることができるために、共に集まるべきである。主がご自分の代理を選び、ご自分の宣教師たちを聖霊によってバプテスマを授けられるようにと特別に祈るべきである。ペンテコステの祝福が下る前に、10日の間弟子たちは祈った。効果のある祈りを捧げ、神にますます近づき、彼らの罪を告白し、神のみ前に彼らの心をへりくだらせ、そして信仰によってイエスを見あげ、このお方の御姿に変えられるということが何を意味しているかということを彼らに理解させるためにその期間を必要とした。祝福が実際に下ったとき、それは彼らが集まっていた場所全体を満たした。そして力を与えられて、彼らは主人のために効果的な働きをなすために出て行った。わたしたちは、弟子たちがペンテコステの日に祈ったように、聖霊の降下のために熱心に祈る必要がある。(ホーム・シヨナリ- 1893年11月1日)

7月26日

## 奉仕のために力を与えられる

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。」(使徒行伝 2:1-4)

自己を捨て、聖霊が心に働きかけてくださるために場所を空け、神に全く献身した生涯を送る者の有用性には限りがない。ペンテコステの日の聖霊の降下の結果は何であっただろうか。よみがえられた救い主の喜びの知らせが、人の住んでいる世界の果てまで伝えられた。弟子たちの心は、満ち満ちて、深く、遠くまで及んでいる慈善に満たされていたので、「わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない」(ガラテヤ 6:14)と証言しながら、地の果てにまで出て行かずにはおれなかったのである。彼らがイエスのうちにあるままの真理を宣べ伝えたとき、心はメッセージの力に屈服した。教会は、いたるところから改宗者が集まってくるのを見た。背教者たちは再び改心した。罪人たちは大いなる値の真珠を捜し求めることにおいて、クリスチャンと一つになった。福音の最も苦い敵であった者たちは、福音の擁護者となった。弱い者は「ダビデのようになり、またダビデの家は「主の使のようになる」(ゼカリヤ 12:8)という預言は成就された。すべてのクリスチャンは自分の兄弟のうちに神に似た愛と慈善を見た。一つの関心が支配していた。模倣するという一つの主題が他のすべてを見えなくした。信者の唯一の大望はキリストの品性の写しを反映し、このお方の御国の拡張のために働くことであった。

聖霊が注がれたのは、彼らが高い地位を得ようともはや争うことをやめ、完全に一致した後であったことに注意しなさい。彼らは心一つにした。すべての相違は捨てられた。……罪人が生きると死なれたお方の霊が、信者の会衆全体を生き生きとさせたのであった。

キリストは、霊の神の感化がご自分に従う者たちと最後までであると宣言された。しかしこの約束は感謝されるべきほどには、感謝されていない。……わが兄弟姉妹方、聖霊を請い求めなさい。神はご自分がなされたすべての約束の背後に立っておられるのである。(ビュー・アンド・ワールド 1908年4月30日)

7月27日

## 真の賜物とその偽物

「さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、この物音に大ぜいの人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあっけにとられた。そして驚き怪しんで言った、見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それなのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか。」(使徒行伝 2:5-8)

このように言葉がいろいろ異なっていたことは、福音宣伝のためには非常な妨げとなったはずであった。そこで神は、不思議な方法で弟子たちの不足を補われたのである。聖霊は彼らが一生かかってもなし遂げられないことを彼らのためになされた。弟子たちは今、自分たちの働きかけている人々の言語を正確に話して、福音の真理を広く宣伝することができた。この奇跡的な賜物は、彼らの任務が天の認印を押されたものであることを世に示す確かな証拠であった。この時から弟子たちの言葉は、母国語で語ろうと、外国語で語ろうと、純粹で単純で正確であった。……

祭司や役人たちは……〔ガリラヤの無学な者たちは〕祭りのために用意されていた新酒を飲み過ぎて酔ったためだとふれ込んだ。中でもとりわけ無知な者たちはこの主張を真に受けたが、知的な者たちはそうではないことを知っていた。そしてそのような違った国語を知っていた人々は、弟子たちの使っている言葉が正確であることを証言した。(患難から栄光へ上巻 34, 35)

ある……人々は賜物と彼らが呼んでいる物を働かせ、主がそれらを教会に置かれたと言うのである。それらは彼らが異言と呼ぶ意味をなさないたわ言であるが、それらは人にとって未知であるばかりではなく、主にとっても全天にとっても未知である。そのような賜物は、大いなる欺瞞者による助けのもとにある男女によって作り出されたのである。……狂信と騒ぎは、信仰の特別な証拠と考えられてきた。ある者たちは、力強い幸福な時を持たない限り、集会で満足しないのである。彼らはこのために働き感情の興奮を起こすのである。しかし、そのような集会の感化は有益なものではない。彼らの幸福感は正しい源から来ていなかったもので、舞い上がるような嬉しい気持ちが去ると、彼らは集会の前よりもっと低い状態に沈むのである。靈的発達のために最も有益な集会は、厳粛さと心を深く探ること、各自が自分自身を知ることが求め、熱心にまた深いへりくだりのうちに、キリストから学ぶことを求めることによって特徴づけられている集会である。(教会への証 1 巻 412)

7月28日

## 救いのための一つの名

「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝 4:12)。

イスラム教は改宗者を多くの地に持っており、その支持者たちはキリストの神性を否定している。この信仰が蔓延するのであろうか。そして、真理の支持者たちは誤りを覆す非常に熱心さを表すことも、世の唯一の救い主の先在性を人々に教えることもしないのであろうか。ああ、神のみ言葉を調べ、信じ、世にイエスをその神性と人性のうちに示し、力と霊の実証のうちに、「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝 4:12)と宣言する者たちをわたしたちは何と必要としていることだろう。ああ、今キリストを生活と品性において示し、このお方を世の前に父の栄光の輝きとして掲げ、「神は愛である」と宣言する信者たちを何とわたしたちは必要としていることだろう。

死につつある世はあなたの前にあり、あなたはこの境界線のどこにおいてもなすべき働きを見出すことができる。しかし、あなたはキリストが死なれた者たちの救いのために何をしているのだろうか。神は人々が救いの良い知らせを聞くことができるようにと、ご自分の摂理のうちに、すべての地に生きた代理人が到来するために道を用意してこられた。今やすべてが整い、天使たちは彼らが出て行って神に魂を引き寄せることにおいて、キリストに従う者たちと働くことができるようにと、この最後の時代への真理を信じる者たちの協力を待っている。

全天は人の救済に関心を寄せており、働きは急速に完了されて神の国が来るのであり、水が海を覆っているように、地は神の知識によって満たされるのである。天の知的存在者たちの大いなる願いは、敵の策略によって惑わされてきた者たちの前に、長い間誤って伝えられ誤解されていた神の品性が正しく表されることである。サタンは自分の属性を神に押しつけてきた。そして今こそ、キリストのみ名が異邦人の間において大いなるものとなるべき時ではないだろうか。……

魂が初めに真理へと改心するとき、彼らはキリストが彼らから、活発な心からの奉仕において何を求められるか—このお方が彼らにこのお方の道徳的なぶどう園において働き人になるように招かれること—を教えられるべきである。彼らの努力がどんなに心配するようなものであろうとも、どんなに彼らの働きが不完全であろうとも、彼らは忍耐深く優しく辛抱されるべきである。なぜならもし彼らが柔和で心のへりくだったものであるなら、主が失敗と思われるものを、めざましい勝利に変えることができるからである。(ホーム・ミヨナリ 1892年9月1日)

7月29日

## わたしたちはキリストについて何を経験したか

「そこで、〔大祭司とその仲間の者たちは、〕ふたりを呼び入れて、イエスの名によって語ることも説くことも、いっさい相成らぬと言いわたした。ペテロとヨハネとは、これに対して言った、神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない。」(使徒行伝 4:18-20)

全世界は福音のために開かれつつある。エチオピアは神に手をさしのべている。日本、中国、印度から、アメリカ大陸のまだ暗黒な土地から、世界の各地から、罪に悩み愛の神の知識をもとめる人々の叫びがよせられている。神について、キリストのうちにあらわされた神の愛について、まだきいたことのない人々が幾百幾千万という。彼らはこの知識を与えられる権利を持っている。彼らはわたしたちと同様に救い主の愛をうける資格がある。彼らの叫びに答えるのは、この知識を授けられているわたしたちの責任であり、またわたしたちからこの知識をわけあたえられる子供たちの責任である。イスラエルの歴史の重大な危機に王妃エステルに向かって「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとそれが知りましょう」(エステル 4:14)と言われた言葉が、今日の重大な時にあたって、福音の光に照らされたすべての家庭、すべての学校、すべての親、すべての教師に向かって発せられているのである。

福音宣伝の働きがはかどったり妨げられたりするとき、われわれはその結果を自分自身や世人とむすびつけて考えるが、これを神とむすびつけて考える人は非常に少ない。罪のために創造主が受けられた苦しみを思う人は非常に少ない。全天はキリストと苦しみを共にしたが、しかしその苦悩はキリストが人性をとって現われたときに始まったのでもなければ終わったのでもない。十字架は、罪が初めてあらわれたときから神の心に生じた苦痛を、わたしたちの鈍い感覚に示すものである。(教育 310, 311)

すべての者は、自分自身の経験を通して、「神がまことであることを、たしかに認め」(ヨハネ 3:33)ることができる。彼はキリストの力について自分自身が見て聞いて感じたことの証を担うことができる。彼はこのように証言することができる。

「わたしは助けを必要としていた。わたしはその助けをイエスのうちに見出した。すべての必要は満たされ、わたしの魂の飢えは満たされた。聖書はわたしにとってキリストの啓示である。このお方はわたしにとって神なる救い主であられるので、わたしはイエスを信じる。聖書がわたしの魂への神の声であることを見出したので、わたしは聖書を信じる」。(教会への証 8 巻 321)

もし神の証人たちが……沈黙を守るならば、石が直ちに叫ぶであろう。神に栄光が帰せられる。(現代の真理 1893 年 1 月 12 日)

7月30日

## 信者の上にある大きなめぐみ

「信じた者の群れは、心をつにし思いをつにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた。使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた。」(使徒行伝 4:32, 33)

初代教会は、おのれを忘れて惜しみなく施すことによって、大いなる喜びに満たされた。なぜなら信者たちは、自分たちの努力が、暗黒の中にいる人々に福音の言葉を伝えるのを助けていることを知っていたからである。彼らの物惜しみしない心は、彼らが神の恵みをむだに受けなかったことをあかししている。聖霊のきよめによる以外に、いったい何が、このような寛い心を生じさせることができようか。信者と未信者の目の前において、これは恵みの奇跡であった。(患難から栄光へ下巻 24, 25)

その時代において主がご自分の民のためになされたことは、今日も不可欠であり、その時以上に必要とされている。そして、このお方は今日も自分の民のためになして下さるのである。そして、悪の増加がさらに決定的な悔い改めへの呼びかけを要求しているので、わたしたちははるかにまさる熱心さをもって働き、はるかに大きな規模で聖霊に伴われるべきである。

現代の真理の光が上に輝いている者たちはすべて、暗闇の中にいる者たちに対する同情によって動かされるべきである。すべての信者から光が、明白な、はっきりとした光線のうちに反射されるべきである。ペンテコステの日の後に、ご自分の代表の使者たちを通して主がなされたのと同様な働きを今日なさろうと待っておられる。今、万物の終わりが近づいているとき、教会の熱意が初期の教会の熱意にさえ勝るべきではないだろうか。神の栄光への熱意は、力強い力を持って真理への証を担うように弟子たちを動かした。この熱意がわたしたちの心を贖いの愛の物語、キリスト、十字架につけられたキリストの物語を語る願望によって奮い立たせるべきではないだろうか。神の力が使徒たちの時代よりも、今日さらに力強くあらわされるべきではないだろうか。(レビュー・アソッド・ハラルド 1903年1月13日)

聖霊の感化の下で、一日のうちに何千もの者たちが改心した。み霊の言葉が新たに力をもって鋭くされ、天の稲妻をあびて、不信を切り裂いて進むのである。弟子たちの心は、満ち満ちて、深く、遠くまで及んでいる慈善に満たされていたので、〔キリストについて〕証言しながら、地の果てにまで出て行かずにはおれなかった。……彼らは救われるべき者たちを教会に加えるための熱烈な切望によって満たされていた。彼らは、すべての国民が真理を聞き地が主の栄光によって満たされるようにと、信者たちに目を覚まし自分たちの持ち場を果たすようにと呼びかけたのであった。(同上 1905年1月26日)

7月31日

## 神は偽りのない寛大さを尊重される

「彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売った物の代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた。クプロ生れのレビ人で、使徒たちにバルナバ（「慰めの子」との意）と呼ばれていたヨセフは、自分の所有する畑を売り、その代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた。」（使徒行伝 4:34-37）

信者たちのこのような寛容さは、聖霊が注がれた結果であった。福音を受け入れた人々はみな、「心をつにし思いをつにし」た。彼らの心はただ一つの共通な関心事に支配されていた。それは彼らに委託された伝道事業を成功させることであった。彼らの生活に、貪欲がはいり込む余地はなかった。兄弟たちへの愛や自分たちが引き受けた働きに対する愛は、金銭や所有物に対する愛よりも強かった。彼らは地上の富よりも人の魂を高く評価していることを、実際の働きで証拠だてた。

神のみ霊が生活を支配するときには、常にこのようなことが起こるのである。心がキリストの愛で満たされている人々は、ご自身の貧しさによってわれわれが富むものとなるように、われわれのために貧しくなられたキリストの模範に従う。金銭、時間、感化力など、神のみ手からさずけられた賜物すべてを、彼らはただ福音のわざを進展させる手段として重んじるのである。初代教会ではそうであった。そして、今日も、教会の中で、教会員たちが聖霊の力に導かれて、世俗的な事柄への愛着を捨て、自分たちの同胞に福音を伝えるために、よろこんで犠牲を払うことが見られるならば、宣べ伝えられる真理は、聞くものの心を力強く動かすであろう。……深い確信がその場にいたすべての者にやどり、直接に神のみ霊の感化を受けたアナニヤとサツピラは、ある資産を売った収益を神にささげる誓いを立てていた。

考え抜いた末、自分たちの資産を売ることに決めた。そして彼らはその収益を全部共同資金にささげたふりをして、その実、売り上げの大部分を手放さなかった。このようにしてふたりは、共同の蓄えから生活を保証され、同時に兄弟たちからも高く評価されると思っていた。

神は偽善と虚偽を憎まれる。アナニヤとサツピラは神との取り引きで詐欺行為を行った。彼らは聖霊を欺いたために、その罪はたちどころに厳しく罰せられた。（ビュー・アンド・ワールド 1911年2月2日）

### 研究 3

#### 神の憐れみの最後の招き



## 「最も尊いメッセージ

### —第三天使のメッセージそのもの—

前回は、預言されている第三天使の大いなる叫びについて見てきました。それは、神のご品性を擁護することであり、つまり神の律法を守ることでした。

それでは、そもそも第三天使のメッセージとは、何でしょうか。

#### 最も尊いメッセージ—第三天使のメッセージそのもの

最も尊い—それについて、聖書の中で次のように記されています。

「わが愛する者は白く輝き、かつ赤く、万人にぬきんで、その頭は純金のように、その髪の毛はうねっていて、からすのように黒い。その目は泉のほとりのはとのように、乳で洗われて、良く落ち着いている。そのほおは、かんばしい花の床のように、かおりを放ち、そのくちびるは、ゆりの花のようで、没薬の液をしたたらす。その手は宝石をはめた金の円筒のごとく、そのからだはサファイヤをもっておおう象牙の細工のごとく、その足のすねは金の台の上にすえた大理石の柱のごとく、その姿はレバノンのごとく、香柏のようで、美しい。その言葉は、はなはだ美しく、彼はことごとく麗しい。エルサレムの娘たちよ、これがわが愛する者、これがわが友なのです」(雅歌 5:10-16)。

「きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(ペテロ第一 1:19)。

そうです、そして第三天使のメッセージによって、主はこの救い主とこのお方の義をご自分の民に提示してくださったのでした。

「主はその大いなる憐れみのうちに、ワゴナー長老とジョーンズ長老を通して、ご自分の民に最も尊いメッセージを送ってくださった。このメッセージは世の前

に上げられた救い主、全世界の罪のための犠牲をもっと顕著に提示するためのものであった。それは保証人(担保)を信じる信仰を通しての義認を提示し、神のすべての戒めへの従順のうちに表されているキリストの義を受けるように民を招いた。多くの人々はイエスを見失っていた。……すべての力がこのお方の御手のうちに与えられている。それはこのお方が豊かな賜物を人々に施し、ご自身の義という値のつけられないほど高価な賜物を無力な人間に与えることがおできになるためである。これこそ、神が世に与えるようにと命じておられるメッセージである。それは第三天使のメッセージであり、大声で宣布され、大規模なこのお方の御霊の注ぎが伴うべきメッセージである」(牧師への証 91, 92)。

値がつけられないほど高価な賜物について、み言葉は次のように述べています。

「高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである」(マタイ 13:46)。そして「キリストの義は、純粋な白真珠」とあります(キリストの実物教訓 92)。

では、この高価な賜物はどのように与えられたのでしょうか。

「キリストの比類のない魅力。これこそ、わたしがあなたがたの思いの前に提示しようとしてきたものである。ワゴナー兄弟がミネアポリスでこれらの見解を提示したとき、それはわたしと主人との間の会話を除いては、この主題に関してわたしが人間の唇から聞いた初めての明確な教えであった。わたしは、神が幻のうちにわたしにそれを提示して下さったから、わたしはそれが非常に明確に見えるのだ、他の人々はそれを一度もわたしのように示されたことがないから、それを見ることができないのだと、自分自身に言い聞かせてきた。そして他の人がそれを提示したとき、わたしの心の一つ一つの繊維細胞が、アーメンと言った」(エリ・G・初作 1888 年原稿 348, 389)。

「多くの貴重な光がこの〔1888 年のミネアポリスの〕集会で提示された。神の律法が高められ、イエス・キリストの福音という枠組みの中で民の前に置かれた。……わたしはフィールドの至る場所で次のような数多くの証を聞いた。『わたしは光、尊い光を見出した。』『わたしの聖書は、新しい書物である』」(エリ・G・初作 1888 年原稿 831)。

「わたしたちの天の希望は、キリストだけに集中されなければならない。なぜなら、このお方がわたしたちの身代わりであり、担保だからである」(セクレット・メッセージ 1 巻 363)。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」神は世にキリストを与えて下さった。……

わたしたちが罪深い世界の贖いのための天の大いなる賜物のことを考えるとき、……この福音のメッセージは新約聖書の中の最も尊い聖句の一つである。

それが受け入れられるとき、それは受ける者の生活により行いを生み出し、その価値はダイヤモンドや金にはるかに勝るのである。それには地上生活に喜びと慰めをもたらし、信じる者に永遠の命を授ける力がある。ああ、わたしたちの理解力が恵みによって十分に啓発され、その十分な意味をつかむことができるように！」(ビュー・アノド・ハルド 1908年3月5日)。

「イエスがわたしのためにご自分の尊い命を下されたことを考えるとき……わたしはこのお方の愛を語り、聖徒の集会でこのお方の力について伝えることができるように、健康をもちたいと望む。……尊いのは、ただこのお方の贖罪の血である。尊いのは、このお方の義認する義である。このお方はわたしにとってすべてのすべてであられる。……『であるから、信じるあなたがたに、このお方は尊い』。わたしはこれを知っている、わたしはこれを試してきた。それはわたしにとって現実である」(原稿リ-ス7巻145)。

### 最も尊いのは一命・血・義

「より頼んでいる(信じている)あなたがたには尊いものである」(ペテロ第一2:7)。

「数名の人がわたしに手紙をよこし、信仰による義認のメッセージは、第三天使のメッセージかと問うてきた。そしてわたしは答えた、『それこそ、まさに第三天使のメッセージそのものである』と」(セクレット・メッセージ 1巻372)。

巢にしてしまった」(ルカ 19:46)。

3年前に表されたよりもさらに大きな権威をもって、このお方は「これらのものを持って、ここから出ていけ」とお命じになりました。

かつて宮の祭司や役人たちは、この声の響きに逃げ出したのでした。後になって、彼らは自分たちが恐れたことを恥ずかしく思いました。彼らは二度とこのように逃げることはしないと決めたのでした。

それにもかかわらず、彼らは今もっと恐れて、以前にもまして大急ぎでこのお方のご命令に従って、自分たちの家畜を追い立てながら、宮から大あわてに出ていったのでした。

まもなく庭は、イエスさまに病気をいやしていただくために病人を連れて来た人々でいっぱいになりました。あるものは死にかかっていました。これらの苦しんでいる人々は、自分たちの痛ましい必要を感じていました。

## なすそうめん

### ■材料（4人分）

#### ○なすそうめん

茄子 4本  
片栗粉 適量

#### ○麺つゆ

水 600CC  
黒糖 小さじ1  
粉末昆布だし 5g  
しょう油 大さじ2  
塩 小さじ1

#### ○薬味

生姜 1片  
小ねぎ 適量

### ■作り方

1. 麺つゆの材料を入れて、鍋にかけ、一煮立ちさせておきます。
2. 茄子は3ミリ程の太さの千切りにします。（アク抜きはしなくて大丈夫です）
3. 生姜は皮をむき、なるべく細い千切りにして、水にさらします。シャキッとしたり水気をきります。
4. 千切りにした茄子に片栗粉をまんべんなくまぶし、ザルに入れて、余分な粉を振り落としします。（数回に分けるとやりやすいです）
5. 大き目の鍋にたっぷりの湯を沸かし、茄子がばらけるように少しづつ入れ、手早く箸でかき混ぜます。
6. 茄子の色が少し変わり、しんなりしたら湯をきります。
7. 氷水、または冷たい流水で手早く冷やします。
8. ゆであがった茄子を麺つゆの中にほぐすように軽くかき混ぜます。
9. 器に茄子・めんつゆを入れ、針生姜と小ねぎを飾ります。

## 教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教：11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



## 聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱13号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。



## 書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

## 第28話(1)

### 「これらのものを持って、ここから出ていけ」

翌日、キリストは宮に入られました。3年前、このお方は外庭で人々が売り買いしているのをごらんになり、そして彼らをいましめて、外に追い出されたのでした。

今、このお方がふたび宮に来られると、いまだに同じ商売が続いているのをごらんになりました。庭は、牛、羊、鳥たちでいっぱいでした。これらは自分の罪のために犠牲をささげたいと望む人々に売られていました。

この商売にたずさわっている人々は、強奪（ごうだつ）や強盗を行っているのでした。庭からのガヤガヤという音があまりに大きかったために、中にいる礼拝者たちにとって深刻なさまたげとなっていました。

キリストは宮の階段の上に立たれ、そして再びこのお方のするどい視線が庭を見渡しました。すべての目がこのお方に向けられました。人々の声や牛たちの鳴き声は静まりました。すべてのものが驚きと恐れをもって神の子を見ました。

神性が人性を通してひらめき、かつて一度も表されたことのない尊厳（そんげん）と栄光がイエスさまに与えられました。沈黙はほとんど耐えがたいほどでした。



ついにこのお方はすんだ音調で、かつ大嵐のように人々を一掃するほどの力をもって言われました。

『わが家は祈の家であるべきだ』と書いてあるのに、あなたがたはそれを盗賊の

(43 ページに続く)